

老若男女

仙頭直美

三年前の夏、奈良の元興寺(もとこうじ)というお寺で地蔵会が行われるというので行ってみた。境内は、多くの石仏が灯(あかり)さされて、美しく心が洗われるやうだった。帰り際、ちょうど禅室の縁の前、切り口を斜めに割った竹に、水を入れ、その水を浮かべているものを「キバキ」と呼んでいる人たちがいた。その時の私は彼らに思わず声を掛け、「この竹、もう一つもいらいますか?」と訊いた。「ああ、持って行っていいよ」と快く返事をしてくれた男性と、こんな真面目な話を聞いてもへへとはその時、夢にも思わぬ。

今年、私はその寺、元興寺で映画を撮っている。あの時、竹をくれた男性は、庭師の小野さんといい、元興寺案内の浮図田と呼ばれる、石仏がずい

と並んだ庭を歩いた方である。十二年ほど前、それまでは山のふもとに積まれた石仏、中にはバラバラになってしまっているものもある。その時間を費したのもある。浮図田は、並べかえ、美しいお寺がたに蘇(よみがえ)らせたのだ。

その時を振り返って小野さんは言う。十二年経った今、あの時の、点(てん)であった想いが、思いがけず広がりを持ち、線(せん)になつてくる。例えば、庭師が竹を挿(さ)げたのが三年の時を経て映画という世界になつてゆく。今とあの線上の二つかも知れない。今ある、平成千三百年の歴史がはげへん

だ行事もまた、最初はこんな具合で始められたのだらう。それが命をつないで、時を経て、歴史となつてゆく。私は廻り歩きがある。

は、この地蔵会が千年も三千年も続いてゆくと思えますよ……。彼の言葉に二十個の炎がゆれる境内は、この時期ゆつくりと秋の気配を運んでゆく。空に浮かぶ、おぼろげな月にも意味がある(せんとう・なみみ＝映画監督)

7 死と生(な)がなく地蔵会



イラスト・松本 孝志

るやうに雲のまにまに姿をあらわす。その表情はまるでほほえんでいそうだった。そこしてゆるやかな風が炎をゆらす時、ここには死者も生者もともにいる。そのこのなんと豊か(とよ)か(か)な(な)だらう、浮図田を見つめる小野さんの横顔を見て思った。

一九九八年、奈良元興寺は、世界遺産に登録された。

た。流れゆく時の中で、先祖の残したものを受け継ぎ伝えてゆくのは、教科書の中の事柄(ことば)ではなく、今(いま)ここに立ち立っている事実(じじつ)の積み重ねの中にあるのだ。